



博物館のすぐ近くにWhat's Niiigataモニュメントが登場

■「帆檣成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表した語。人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージしました。

新潟市歴史博物館  
博物館ニュース  
vol.34

■CONTENTS

特集1	新講座・イベントが始まります	P.2~3
特集2	企画展「田んぼで魚とり」展紹介 — 追い込み漁の道具を中心に —	P.4
歴史さんぽ	女池の村道	P.5
おすすめの一冊	「越後 替女ものがたり 盲目旅芸人の実像」	P.5
特集3	蒲原の古墳 — 企画展開催に向けて —	P.6
館長日記	牡丹山諏訪神社古墳と王権	P.7
収蔵資料紹介	差上申一札之事	P.7
博物館 あちらこちら	枝垂れ柳	P.8

# 帆檣成林

—はんしょうせいりん—



## 【たいげんのひろばプログラム】

楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申込み・対象・参加費
5月16日(土) 14:00~15:30	みなとびあもめん部	糸紡ぎや機織りなどに興味のある一般の方々とともに、博物館資料を使いながら、むかしの手仕事を再現する試みです。	申込み必要 詳しくはお問合せ下さい
5月17日(日) 14:00~15:30	こども歴史クラブ 「古代の役人たいげん」	古代の役人になって、木簡に字を書いてみましょう。また、さまざまな役割を果たした木簡の種類についても見てみましょう。	こども歴史クラブの部員への登録が必要です
5月23日(土)・24日(日) 14:00~15:00	糸紡ぎをしよう	綿から糸をつくります。種を取ったり、綿をやわらかくしたり、糸を紡いだりするための道具を使ってみましょう。	申込み不要
5月30日(土)・31日(日) 14:00~15:30	針穴カメラをつくって 写真をとろう	ピンホールカメラを組み立てて、実際に撮影しましょう。1日目はカメラの製作、2日目に撮影・現像を行います。	要申込み5/22必着・ 小学生3年生以上10人・300円

お申込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。締切は必着です。プログラムは予定となっていますので、詳細は当館までお問い合わせください。

### 現在開催中の企画展

#### 田んぼで魚とり展 ~低湿地の漁と漁具~

低湿な蒲原平野の生活文化、とくに農家の漁撈をテーマに写真や民俗資料を展示します。

【会期】 2015年 4月11日(土)~5月31日(日) (休館日) 月曜日  
 【観覧料】 大人500円[400円] / 大学生・高校生300円[240円] / 中学生・小学生200円[160円]  
 ※中学生・小学生は、土・日・祝日の観覧料が無料です。  
 ※[ ]は団体料金(20人以上) ※企画展観覧料で常設展示もご覧いただけます。  
 【主催】 新潟市歴史博物館・新潟日報社  
 【関連事業】 ◆展示解説会:毎週日曜日 14:00~(1時間程度) ※5/17のみ15:30~

### 博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。

【時間】 13:30~15:00  
 【会場】 本館2階セミナー室  
 【申込】 不要(当日受付・定員80人程度)  
 【資料代】 100円(資料のない回は無料)  
 ◆5月の講座:5月24日(日) 講師:中村 里那  
 法眼(ほうげん) 浚明  
 —「法眼」という位を得た新潟の絵師—  
 ◆6月の講座:6月28日(日) 講師:木村 一貫  
 シリーズ《新潟の美術》戦争と美術  
 ◆7月の講座:7月26日(日) 講師:安宅 俊介  
 大庄屋制と豪農—新発田藩領における格式獲得をめくって

### 史楽講座

館外の研究者を招いて、テーマに沿ってお話いただく4回の講座を開催します。2015年度のテーマは「中世」です。

【時間】 14:00~16:00 【会場】 本館2階セミナー室 【定員】 80人  
 【申込】 往復ハガキ・FAX・メールのいずれかにて、講座名と氏名・住所・電話番号を明記して、当館まで。6月4日(木)必着。  
 【資料代】 全4回申込み2,000円(応募多数の場合抽選)  
 ◆第1回:6月14日(日) 講師:矢田俊文氏(新潟大学人文学部教授)「謙信登場への途」  
 ※第2回は10月4日の予定です。全回の内容など詳しくはホームページをご覧ください。当館までお問い合わせください。

### 博物館 あちらこちら 枝垂れ柳

本館まわりの剪定されたシダレヤナギは、冬の間は誠に寒々しく、これが青柳だったとは信じがたいほどです。しかし春めいて青枝が伸び、やがて枯柳は、たおやかな姿へと変わっていきます。もともと、その成長の早さが通行者をわずらわせ、散っては堀の浄化をはばんだりもします。「堀と柳と美人」の風情も今は昔。とかく効率性が優先される時代にあっては、その旺盛な生命力が疎まれてしまうことも多々あるのです。この、手のかかる育ち盛りの少年たちと愚直につき合って、ありし日の街路の風をたぐりよせることも、歴史博物館なればこそ、かもしれませぬ。絶えしかと思ふ芽が出て来し安堵(中田みづほ)



### 次回 企画展

#### 古墳ワールド! — 蒲原の古墳 —

近年明らかになってきた蒲原の古墳像を、新情報も踏まえてわかりやすく解き明かします。

【会期】 2015年 7月18日(土)~8月30日(日)  
 【観覧料】 大人 500円[400円] / 大学生・高校生 300円[240円] / 中学生・小学生 200円[160円]  
 ※中学生・小学生は、土・日・祝日の観覧料が無料です。  
 ※[ ]は団体料金(20人以上) ※企画展観覧料で常設展示もご覧いただけます。  
 【関連事業】 ◆展示解説会:毎週日曜日 14:00~(1時間程度) ※8/30(日)のみ16:00から開催



牡丹山諏訪神社古墳 イメージ画

#### 休館のお知らせ

6月1日(月)~8日(月) 資料燻蒸のため休館いたします。

### 編集 後記

2015年度のみなとびあでは、本号特集1で取り上げているように、じっくりと新潟の歴史を味わっていただく新たな企画が始まっています。部活動としてさまざまな歴史体験にトライできる「こども歴史クラブ」や、1つのテーマについて館外の研究者を招いてお話いただくシリーズ講座「史楽講座」などです。一歩踏み込んで歴史を楽しんでみませんか? 詳しくは当館ホームページをご覧ください。どうぞお気軽にお問い合わせください。(中村)

#### ■お問い合わせ・申込みは博物館まで...

新潟市歴史博物館 みなとびあ  
 住所: 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
 Tel: 025-225-6111 Fax: 025-225-6130  
 E-mail: museum@nchm.jp http://www.nchm.jp  
 【休館日】 毎週月曜日、祝日の翌日  
 【開館時間】 (4-9月) 9:30~18:00 / (10-3月) 9:30~17:00



みなとびあ歴史発見プロジェクトは、こどもからおとなまで幅広く、みなとまち新潟の歴史に親しみ、自ら歴史を発見する喜びを知ってもらい、まもなく開港150周年を迎える新潟の街をみんなで盛り上げていこう! という事業です。

「みなとびあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。



帆檣成林「はんしょうせいりん」第34号  
 編集・発行/新潟市歴史博物館 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10  
 印刷/株式会社ウエッソ

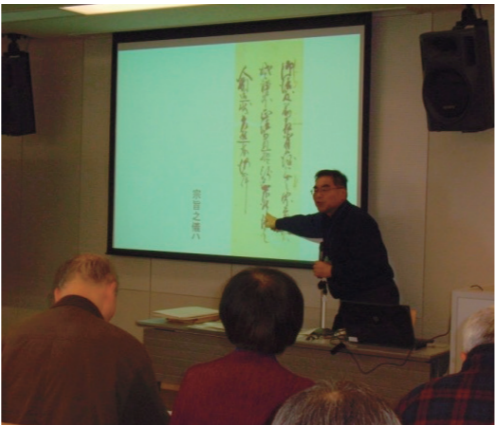
# 新講座・イベントが始まります

田嶋 悠佑

みなとびあでは、今年度から「みなとびあ歴史発見プロジェクト」と題して新たな企画を開始します。

具体的には、これまでも好評をいただいていた歴史系の講座と根強い人気のある体験イベントの拡充を行います。歴史系の講座では毎回テーマを設定し、外部講師を招いてわかりやすく語ってもらう「史楽講座」と、これまでの古文書入門講座に加え、参加者により難しい古文書に挑戦し、解読スキルを磨いていただく「古文書講座中級編」を新設します。また、体験イベントでは単発のイベントに終わらず、よりリピーターとして来館してもらえらる工夫を組み込んだ「みなとびあこども歴史クラブ」を新設します。そして自主事業の企画展として「みなとびの仕事をまわかし」展を冬季に開催します。

みなとびあの前々から聞かれていました。平成二十三年に旧小澤家住宅が開館され、中級編の位置づけがなされましたが、受け入れられる人数にはやはり限界がありました。今回開講されるみなとびあの「古文書講座中級編」は全十五回ゼミ形式で行われます。ゼミ形式であるため参加者の予習・復習が求められるようになり、総じて学習は大変になるものの、力を伸ばしたい参加者にとってはやりがいのある講座になると思います。



平成22年度古文書講座の様子

## ◆古文書講座中級編について

「史楽講座」と同様に、今年度から開催されるのが「古文書講座中級編」です。古文書講座は開館初年度の平成十六年に十八回のゼミ形式で行われた後、長らく行われてきませんでした。平成二十二年度から五回の基礎講座として再開されました。多くの人数を受け入れることのできないゼミ形式ではなく、講義中心の講座とすることにより参加人数も平成十六年度の十五人から、平成二十二年度以降は九十人まで受け入れることが可能になりましたが、基礎講座であるため毎年大幅な内容の変更はなく、解読技術の上達を目指す、という点においては課題を残していました。受講者からもより上級編の講座を開講してほしいと

では館の事業に賛同していただき、企業や団体から協賛をいただき、魅力的なイベントを行うことで、より地域の歴史に親しみ、自ら歴史を発見する喜びを知ってもらおうとする試みです。また自主事業の講座で得た受講料などの収益は自主企画の企画展開催へ充当することが考えられています。本稿ではプロジェクトの内、春季から始まる「史楽講座」「古文書講座中級編」「みなとびあこども歴史クラブ」について紹介します。



夜間に行われた講座もあった(平成16年度夏の博物館講座)

という声が多々聞かれていました。平成二十三年に旧小澤家住宅が開館され、中級編の位置づけがなされましたが、受け入れられる人数にはやはり限界がありました。今回開講されるみなとびあの「古文書講座中級編」は全十五回ゼミ形式で行われます。ゼミ形式であるため参加者の予習・復習が求められるようになり、総じて学習は大変になるものの、力を伸ばしたい参加者にとってはやりがいのある講座になると思います。

## ◆「みなとびあこども歴史クラブ」

みなとびあでは「たいけんプログラム」と題して、古代の生活や昭和三十年代以前の遊び・暮らしの道具の使用などの体験活動を開館以来、ほぼ毎週末に行っています。各プログラムの参加者は十人前後のことが多く、時には五十人を超えることもあり、公表されている平成二十五年度の数値では延べ一・二九人が参加しました。現場に出てみると「〇〇のたいけんは、今年は何もないのか、次はいつ行おうのか」と尋ねるリピーターの方も見受けられます。このようにある程度みなとびあの事業として定着した感のある「たいけんプログラム」ですが、日にちをまたぐプログラムになると参加者が減ってしま

## ◆「史楽講座」について

「史楽講座」は毎回テーマを設定し、外部講師を招いてわかりやすく語ってもらう企画です。今年度は「中世」をテーマに六月から来年二月まで、全四回の講座を開催します。みなとびあでは、これまでも、館長がコーディネートして外部から講師を招いて実施する「館長講座」や、当館の学芸員が講師をつとめる「博物館講座」を実施してきました。それと「史楽講座」の違いはどこにあるのでしょうか。

テーマという点で考えれば、「館長講座」は歴代館長の専門性によって内容が決められてきたため、どうしても全時代をカバーするような内容での開催は困難でした。また博物館講座については学芸員により異なりますが、古代から近現代まで幅広くカバーするものとなっています。なお開館当時には、博物館講座に類似したものでして、「夏に」夏に「夏」の博物館講座が行われ、「吊い」を共通テーマに学芸員三名が話をするという試みも行われたことがありましたが、実現したのはこの



第1回「こども歴史クラブ」

うという課題も抱えていました。今年度から開始する「みなとびあこども歴史クラブ」は、「たいけんプログラム」の課題に対応した新しい試みです。「みなとびあこども歴史クラブ」はたいけんのひろばのメインターゲットである小学生を対象に一年間毎月第三日曜日に開催する連続講座の形を取り、参加するとスタンプがもらえます。五回以上参加の場合には素敵な特典があり、参加者の方々に繰り返し参加していただくやすい環境を整えました。また、年間の活動は、考古・古代・現代の各時代の出来事をテーマにしたもの、衣・食・住にまつわるもの、調査や文化財保護をテーマにしたものと幅広く行い、参加者に興味の対象を広げてもらえるような構成にしました。

一回のみでした。

次にそもそも講座を行う意義・目的について考えますと、館長講座は気鋭の研究者の方から最新の成果を市民の皆さんに知ってもらうことを目的に開催しています。館長講座は歴代館長ファンの市民も多く、毎回一〇〇人を超える応募をいただき、やむなく抽選することも少なくありません。

博物館講座は新潟の歴史文化について各学芸員が調査したことを発表する目的で開催してきました。始まった当初は参加者が少ない回もありましたが、二・三年は参加者が毎回平均四十人、多い時では九十人を超える講座として定着しています。また、当館の運営の観点から見れば、みなとびあの各学芸員が現在どのような調査研究を行っているのかを市民のみなさんに知ってもらう大切な機会となっています。

「史楽講座」はこのように他の講座とは異なる内容と目的を持っていきます。そのため館長講座と博物館講座についても継続、並行して開催します。

## ◆おわりに

みなとびあの予算は削減の一方で、自主財源の確保も課題となっているため、収益とその元となる来館者の確保は今後努力していかなければなりません。その中での事業維持と発展は、みなとびあに限らず多くの博物館が抱えている課題ではないでしょうか。「みなとびあ歴史発見プロジェクト」は具体的な挑戦の第一弾です。この試みは果たしてどのような結果となるのか注目していただき、できましたら多くの方に参加していただければ幸いです。

そして、今後、これまでの来館者の傾向などを踏まえた上で第二弾、第三弾で何をしていくべきか考えていかねばなりません。また、新潟市内内外の様々な施設で多様な形態の講座や文化イベントが開催されている昨今、他施設との差別化だけではなく連携の充実も今後図っていく必要があるでしょう。

どのような事業が来館者増加をもたらすか分析するとともに、博物館の使命として行うべき事業を見失わないことはなかなか難しいことですが、常に私たちはそのことを考えなければなりません。

(たじま ゆうすけ 学芸員)

# 企画展「田んぼで魚とり」展紹介 — 追い込み漁の道具を中心に — 森 行人

晩秋、曾根の街をはずれると、もうカンカラカンカンカンカラカンカンとサシ網に鯉を追う音が肌寒い風に送られて来たが、いかにも低湿地帯ならではの感興をそそらずにはおかない。(金塚友之丞『蒲原の民俗』より)

漁というと、海の漁師が行う漁業がイメージされますが、今回の企画展はかつて農家が稲作のかたわら行っていた漁撈をテーマとします。

昭和二十年から三十年ごろまで、蒲原の平野部農村では、潟はもちろん、水田や堀でも様々な漁が行われていました。



追叩板 (新潟市潟東歴史民俗資料館蔵)



ガチャ (当館蔵)



デンコゾツ (個人蔵)



『蟹の手振り』潟漁の画※部分 (当館蔵)

田植えを終えた水田では、六月から盆のころまでドジョウ捕りを行いました。ドジョウ捕りには、笠という竹を編んで作った筒を、田の中や水を落とす水口に仕掛けて捕る方法と、堀に網を設置して、上流から音を立ててドジョウを追いつまむ方法がありました。

秋、収穫を終えた水田でも漁が行われました。排水機を止め、湛水が増した水田や堀を漁場として漁が行われました。各地で行われた漁の一つに、舟べりや木の板などを叩いて、コイやフナを追いつまむ漁があります。鳥屋野潟(中央区)や福島潟(北区)、干拓前の鏡潟(西蒲区)など、主に広い水面を利用して行われた漁法で、その音からカンカンポイ、ガタガタポイなどと呼ばれています。冒頭

に示した金塚の文章は、鏡潟のカンカンポイが行われ、扇網や刺し網へと魚を追い込む音が遠く響いてくる様子を伝えています。収穫後の耕地に響き渡る音が想像されます。

これよりさらに一〇〇年前、新潟町奉行として赴任した川村修就は、冬の鳥屋野潟で行われた、ヨシの間に潜む魚を追い出し捕らえる「ガタガタ追い」の音について次のような感慨を述べています。

くものを見れば長三尺はかりは、四五寸にて中高に造れる両端に穴をうち、かち緒を通して舟の艦の方に結付太鼓の探のときものにてうつつ水面にひきて其音よし(『蟹の手振り』第九集の読み下しより)

音の出し方には、金塚によれば「(一)あり合わせの棒で舷を叩く(二)太鼓の撥のような特製の叩き棒で舟の縁を叩く(三)ナギ(天候)が良すぎて魚のアシが早いと見れば、掌で舟の外側をゆつくり叩く(四)鮒は気忙しくカンカラカンカラと叩き、鯉は掌を使いポーン・トーンとほどよく叩く場合もある」(金塚『同書』)と、魚種や気候、水面の状況に応じた技法があり、一定の調律を保って音を出すには熟練が必要でした。

市域で行われた追い込み漁には、ガチャと呼ぶ音を出す道具を使った夏のドジョウポイ、氷結した水面をキネやデンコゾツで叩いて追う冬のザイポイ(追い)などがありました。展示では、鏡潟で追い込み漁に使われた追叩板や、ドジョウポイのガチャ、ザイポイのデンコゾツなど、音を発して魚を追った漁具も展示しています。かつての生活の音を今に伝える資料です。

(もり ゆきひと 学芸員)

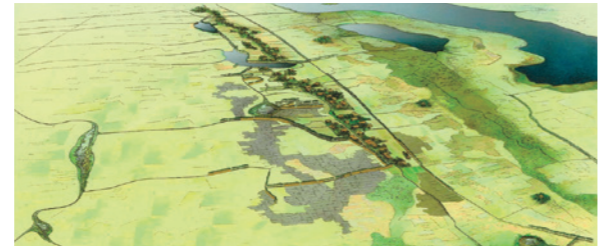
## 歴史さんぽ



# 女池の村道

新潟市中央区女池

戦前の地形図で亀田郷の道路をみると、南北の道は堤防道だけで、東西には砂丘上に連なる村々を貫く糸のような道があるだけです。砂丘列の異なる村へは水路を舟に乗って行きました。戦後の土地改良の後、縦横に新しい道路ができて、昔の堤防道や砂丘の村道は生きています。和合線女池桜木町のバス停あたりから、西側の女池の村道に入ってみましょう。和合線の東側は神道寺の集落です。



女池に入ってすぐの皆応寺は集落の東の端のお寺です。女池の集落はこの細く少々くねくねした道にそって西へと延びています。村道から少し離れてアパートやマンションも目立ちますが、もともと畑や潟だった場所です。しばらく行くと立派な木がそびえる女池親仁山公園があります。ここは女池の名主新田家の屋敷のあった場所で、女池小学校はここに開学します。

際は崖になっていて村道が高いことが実感できます。集落はさらに西に続き、愛宕公園が西の端になります。女池の村道はおよそ2キロメートルの長さがあります。

生垣に囲まれた女池の屋敷地の入口はこの道に向いています。中をのぞくと手前に大きな家があり、その奥に土蔵や小屋、畑があります。道の南側の家は裏が紫鳥線に面していて、今は裏に立派な玄関のある家や別の店になっている所もあるようです。家の脇の道に入ってみると、村道が高く、裏へ向かって下っています。かつて家の裏には堀が通っていました。その堀から家の敷地に堀を引き込み、そこから舟に乗って田畑や遠い村や町へでかけたのです。実はこうした昔の女池を鳥瞰したイラストが当館の常設展示にあります。

さらに西へ向かって少し行くと、「三平池之跡」という碑があります。この池の別名が「女池」です。三平池は埋め立てられて住宅地になっています。女池集落の周囲には、今もある鳥屋野潟のほかにも男池、蓮池などの潟がありました。潟の周囲にはヤチというアシやカツボの群生の中に低木が生えている広大な湿地がありました。女池のヤチの上を今は新潟バイパスが走っています。

亀田郷には女池だけでなく砂丘沿いの村道がいく筋も残っています。細い道をゆったりと歩いて、かつての砂丘の村と広がる低湿地の水田や潟の景観を想像してはいかがでしょう。伊東 祐之(いとう すけゆき 副館長)

さらに広い敷地の家が続き、中には村道よりも高い小山のある家もあります。女池の集落は、千歳大橋と女池インターを結ぶ桜木町線に断ち切られていますが、道路

### おすすめの1冊

## 越後 瞽女ものがたり 盲目旅芸人の実像

瞽女は三味線を携え、唄をうたつて各地を巡業し、暮らした盲目の女性たちのことです。瞽女は江戸時代には城下町や門前町等に定住し、稼業を行っていましたが、明治時代以降は急速に衰退していきます。しかし、瞽女といえれば越後と言われるほど、新潟県域の瞽女は明治以後も存続し各地を回っていました。

本書はそんな越後の瞽女たちから、修業の内容や巡業の様子、組織体制等について聞き取りし、その実態を分かりやすく紹介した内容になっています。長岡市出身の著者は、帰郷後の昭和四十五(一九七〇)年より越後瞽女の調査を始めました。当時すでに瞽女の巡業は存続の危機にあり、瞽女の経験者が彼岸の人となつた今日、本書の報告は貴重な資料になっています。

盲目の女性たちが瞽女の道に入り、厳しい稽古を経て一人前になる過程から、巡業の苦労や楽しみ、唄の演目まで詳しく記されている本書は、越後瞽女の世界に触れる格好の1冊です。

(渡邊 久美子 学芸員)



鈴木 昭英 著  
岩田書院  
2009年7月

# 蒲原の古墳 — 企画展開催に向けて —

小林 隆幸

ヤマトの王の墓として古墳がつくられ始めたのは三世紀半頃とされています。その先が弥生呼の墓として有力視されている箸墓古墳です。奈良盆地東南部の三輪山麓に、それまでにない巨大な前方後円墳として出現しました。その周辺に当時のヤマトの国の中心があり、大王の古墳がつくられて行きます。その後、四世紀後半には古墳の中心が奈良盆地北部に移りますが、奈良盆地に政権の中心があった四世紀に、蒲原でも地域を束ねる有力者が現れ、古墳がつくられました。

特に西蒲原の角田山麓には、前方後円墳の稲塚古墳、前方後方墳の山谷古墳、そして甕龍鏡を持つことで有名な前方後円墳の葛蒲古墳が連続して築かれ、この時期の蒲原の中心地であったことがわかります。また、三条市保内の丘陵上にも、前方後方墳の三王山四号墳、円墳の二号墳、前方後円墳の一号墳が連続して築かれました。これらは他の古墳も含めて三王山古墳群と呼ばれています。なお、豊富な副葬品を持ち、県内最大の前方後円墳である可能性が高まった胎内市の城の山古墳も四世紀につくられています。

四世紀末から五世紀初めには、ヤマトの国に大きな変化があらわれます。奈良盆地にあった国の中心が大阪平野に移動するのです。それに伴って大王の古墳も大阪平野につくられるようになります。巨大な前方後円墳が数多く築かれる古市古墳群や百舌鳥古墳群がそれです。この時期、蒲原でも古墳に変化があらわれます。角田山麓や三条市保内の丘陵上など、それまで連続して古墳が築かれた地域に古墳はなくなり、新津丘陵上に大円墳の古津八幡山古墳が出現します。直接の原因究明は今後の課題ですが、このようにヤマトの中心で見られる変化が蒲原の古墳にも見て取れます。奈良盆地にあった時のヤマト政権と結びついていた角田山麓などの有力者が、政権が大阪平野へ移動することと力を失い、かわって新政権と結びついた新興勢力が、古津八幡山古墳などを築いたのでしょうか。新津丘陵側には、古津八幡山古墳を最大規模に同じ円墳が点在しており、それらが信濃川をはさんで角田山麓の古墳と対峙するような位置にあることも興味深い点です。

その後、五世紀前半には県内初出土となる円筒埴輪を備えた円墳・牡丹山諏訪神社古墳が築かれます。その埴輪が古市古墳群の菅田御廟山古墳（伝応神天皇陵のもの）と共通することから、その工人が関係してつくられた可能性が、あることを新潟大学の橋本博文教授は指摘しています。

五世紀後半の古墳は蒲原では見つかりません。新潟県内では、それまでの古墳の分布の中心は蒲原でした。それが蒲原では古墳が築かれなくなり、魚沼そして頸城に多くの古墳が集まる群集墳がつくられるようになります。五世紀後半とは中国と交渉があった倭の五王最後の雄略大王が活躍し、官人によって政権を強化する新たな政治体制が組まれた時期です。これによって地方も整理され、それまで古墳が築かれてきた蒲原には、新体制と結びつく有力者がいなくなりました。またのかもしれない。

魚沼に築かれた群集墳の被葬者は、新体制の中で台頭してきた勢力とも考えられます。その有力者の墓には武器や武器、馬具が備えられ、それまでの蒲原の有力者とは様相が異なります。

六世紀に入ると蒲原で再び古墳がつくられるようになります。断絶していた三王山古墳群にも古墳がつけられ、あたかも伝統的な有力者が息を吹き返したかのようです。また日本海を見渡す村上市の海岸砂丘上には海人集団との関わりも指摘されている蒲原

つくれるようになります。五世紀後半とは中国と交渉があった倭の五王最後の雄略大王が活躍し、官人によって政権を強化する新たな政治体制が組まれた時期です。これによって地方も整理され、それまで古墳が築かれてきた蒲原には、新体制と結びつく有力者がいなくなりました。またのかもしれない。

山古墳群が築かれるなど、新たな集団の動きも見られます。しかし古墳の数は少なく、新潟県内の古墳の中心は頸城に移っています。この時期に蒲原で古墳を築いた有力者が、この後蒲原に配置された地方官である高志深江国造につながっていくのか、それとも新たな有力者が国造に任命されるのか興味深いところです。

以上、七月十八日、八月三十日の会期で開催する「蒲原の古墳」展に先がけ、当地に築かれた古墳の動向を簡単にまとめてみました。

(こばやし たかゆき 学芸員)



# 館長日記

Diary from the Director of a Museum

新潟市歴史博物館 館長 小林 昌二

## 牡丹山諏訪神社古墳と王権

牡丹山諏訪神社古墳の発掘調査が昨年九月に行われ、出土の須恵器片から築造が五世紀前半と裏づけられました。出土の遺構・遺物などの考証による知見は明快です。筆者専門の文献古代史では、一次史料は稀ですし、編纂史料の『古事記』や『日本書紀』（以下『記』・『紀』）では、事実を踏まえることは困難です。ですが、何か一つでも二つでも文献から理解を深めたいのは専門家のサガです。

橋本博文新潟大学教授は、古墳発見の契機となった円筒埴輪に見えるB種横ハケ技法は、応神天皇陵と伝えられる菅田御廟山古墳の埴輪にも見られ、この技法は王陵系のもの指摘します。また、中国の史書によれば、仁徳天皇とみる説が有力な倭王讃が、使を派遣したのは四二二年です。とすれば『記』の応神・仁徳天皇の巻を開いてみます。

『紀』を見ると、応神の在位期間は四一年、仁徳は八一年です。寿命は応神一一〇歳、仁徳は記事がありません。また『記』では、寿命が応神二三〇歳、仁徳八三歳とあ

ります。信憑性は乏しく、時代の特定には役立ちません。

『紀』の応神紀四〇年正月の記事に、応神天皇が長子オオヤマモリノミコト(大山守命)と次子オオサザキ(仁徳)に、長子と末子とでどちらを親としていとおしいと思ふかと問うくだりがあります。天皇の気持ちを感じたオオサザキは末子だと答えます。その後天皇は、オオヤマモリノミコトに「山川林野」、オオサザキに「国事」、末子のウジノワキイラツコに「日嗣」、つまり天皇位を継がせます。また『記』でも、応神天皇が長子大山守命に「山海之政」を、次子の朱雀命(仁徳)に「食国之政」を、末子のウジノワキイラツコに「日嗣」を継承させたとあります。もとより記事の信憑性は乏しいのですが、この話は王権の肥大化と分化を物語り、王陵古墳の巨大化と対応するよう思われます。

そんな王権と密接に関連する王陵系のB種横ハケ技法埴輪を立て並べる牡丹山諏訪神社古墳の被葬者には、並々ならない副葬品がともに埋納されていたのではないかと想像させてくれます。

### 収蔵資料紹介

#### 差上申一札之事

慶応三(一八六七)年に新潟町を檢分した幕府役人の報告書によると、新潟町の豊は、備後・近江・加賀・越中等から草を仕入れて、町で仕立て、地元周辺だけでなく松前・南部等へ送ったとあり、とくに藁が手に入りやすい松前等では重宝されたと思われる。

廻船によつて運びこまれた材料を、職人が地元の材料と組み合わせ、加工し、製品に仕上げ、廻船で他所へ売りにゆく。豊は、中継と加工という湊町新潟の商業機能の特色をよく示した商品と言えそうです。

新潟町の豊屋は元禄十(一六九七)年に九軒、元治元(一八六四)年には三十六軒あったとされます。今回取り上げる文久三(一八六三)年六月の「差上申一札之事」は、この豊屋に関する資料です【写真①】。

これによると豊屋には本職と弟子職があつたことが分かります。このうち本職が規定をつくりました。それは、弟子職が「年季明」、つまり修業期間を終えて「本職仲間入り」をするさいに金銭を支払わなければならないというもので、弟子職にとつては本職へ参入する障壁となるものでした。

これに対して新潟町検断の田辺道助と年寄の弥兵衛は、この規定そのものだけでなく、こうした本職たちの「自己」規定取極「趣」を「悪弊」を生むもとであ



1 差上申一札之事  
2 豊屋一札之事

るとして差し止めるように命じました。豊屋たちは命令を受け入れました。そのあかしに豊屋一同の連名で請印を押し、た請証文を町会所へ提出しました。この請証文を道助・弥兵衛が新潟奉行所へ提出したものが、本資料「差上申一札之事」です。この請証文によつて弟子職も含めた豊屋一同の名前と人数が分かります。連名の筆頭は徳左衛門です。彼は年不詳ですが新潟町の長者番付に豊屋として最上位に記載されている「他門五ノ丁高橋徳左衛門」だと推定されます。

また、連名の途中に「メ」と記されている箇所があります【写真②】。この「メ」と思われます。人数を数えてみると、本職は三四人、また弟子職は二九人いたことが分かります。よつて、翌元治元年の三六軒という数は本職のみを数えたものと思われる、それ以外にも三〇人前後の弟子職がいたことが推定されます。新潟町の豊はこうした人びとによつて支えられていたのです。

(安宅 俊介 学芸員)

《参考文献》  
新潟市史編さん近世史部会編『新潟市史』資料編2近世1、一九〇。